

The Triangle

Minato Mari Horizons

渡来莉

はるかなるながれ、
ちそうたどりて

京都市京セラ美術館
Kyoto City KYOCERA Museum of Art

湊茉莉：はるかなるながれ、ちそうたどりて

2021年3月16日（火）－2021年6月13日（日）

京都市京セラ美術館 ザ・トライアングル

主催：京都市



令和3年度文化資源活用推進事業

Minato Mari: Horizons

March 16–June 13, 2021

The Triangle, Kyoto City KYOCERA Museum of Art

Organizer: The City of Kyoto

「ザ・トライアングル」について

「ザ・トライアングル」は当館のリニューアルオープンに際して新設された展示スペースです。京都ゆかりの作家を中心に新進作家を育み、当館を訪れる方々が気軽に現代美術に触れる場となることをねらいとしています。ここでは「作家・美術館・鑑賞者」を三角形で結び、つながりを深められるよう、スペース名「ザ・トライアングル」を冠した企画展シリーズを開催し、京都から新しい表現を発信していきます。

The Triangle

The Triangle is a space newly created for the reopening of the Kyoto City KYOCERA Museum of Art. It aims to nurture emerging artists, especially those associated with Kyoto, and to provide opportunities for museum visitors to experience contemporary art. In order to connect the artist, museum, and viewer in a triangle and deepen those connections, the space hosts an eponymous series of special exhibitions and presents new artistic expression from Kyoto.

「はるかなるながれ、ちそうたどりて」に 寄せて

本展では、考古学資料に見られる地層から、古代に存在していた「水のながれ」をイメージしてインスタレーションを構想しました。現在、ザ・トライアングルが立地する場所は、京都盆地東部の鴨川左岸、白川流域に位置する岡崎遺跡に含まれています。古来、河川は時に流路を変え、人々の生活を脅かしてきました。流路沿いには、弥生時代から古墳時代にかけて、集落を守るために溝がつくられています。今回のインスタレーションは、その溝から発掘された古式土師器こしきはじきのスケッチに、これまで関心を寄せてきたエトルリア文明などの古代遺物のモチーフを織り混ぜて構成しました。遙か昔から変わらず地上に降り注ぐ陽の光は、本展の空間をとおして、かつて自然と人間のいとなみの境界であった場所を静かに照らし出し、映し出します。

湊茉莉

On *Minato Mari: Horizons*

For this exhibition, I conceived an installation from examining geological strata shown in archaeological resources and visualizing the flow of water that existed in the ancient past. The place where The Triangle now stands is part of the Okazaki historical site in the Shirakawa River area on the left bank of the Kamogawa River in the Kyoto basin. Long ago, the river would sometimes change its course and threaten the daily lives of people. From the Yayoi (1000 BCE–300 AD) to Kofun (300–538) periods, ditches were dug along the watercourse to protect the local villages. This installation comprises sketches of Haji pottery excavated from those ditches, interwoven with motifs of ancient relics from Etruria and other civilizations that have previously intrigued me. Through the space in the exhibition, the same sunlight that has shone on this ground since time immemorial quietly illuminates and reveals a place that once formed a border between the workings of humankind and nature.

Minato Mari











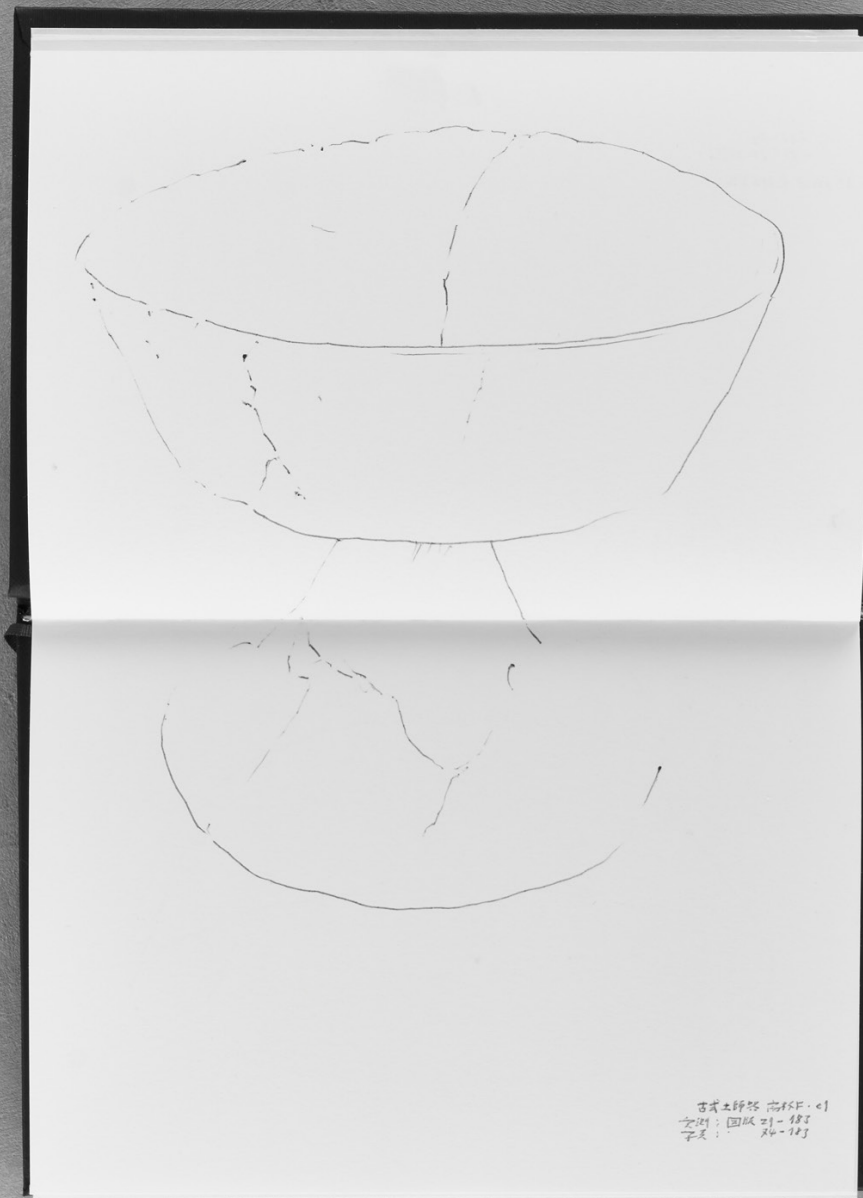














器からイメージへ

国枝かつら



Fig. 1 《渠、壺》「礼拝堂のなかの芸術展 2012」での展示風景、2012 年
Photo: Stéphane Cuisset



Fig. 2 《みずずかるしなの》「北アルプス国際芸術祭」での展示風景、2017 年
Photo: Tsuyoshi Hongo



Fig. 3 《Nemeton》ナンテール市野外劇場コンク、2019-22 年
Photo: Jérémie Souteyrat

湊茉莉は、京都市立銅駝美術工芸高校でデザインを学び、京都市立芸術大学に進学して日本画を専攻。その後フランスへ渡り、パリ国立高等美術学校を卒業してから現在まで、14年間でパリで過ごしている。渡仏後は、その土地の綿密なリサーチや考古遺物のスケッチ、また展示空間への注意深い洞察をもとに、絵画やインスタレーションとして作品を制作。教会の礼拝堂 (Fig. 1) や江戸時代の蔵 (Fig. 2)、野外劇場 (Fig. 3) など、建築物に直接描画を施すプロジェクトも多く、自然光の変化や空気の動きまでを含めて身体的に空間を知覚すること、またその効果を最大限生かすことのできる展示の在り方を追求してきた。

本展において湊は、京都市京セラ美術館が立地する岡崎地域に、現在までいくつもの自然流路が存在していた史実に着目した¹。かつてこの場所にあった複数の流路とそこから出土した土師器を出発点に、考古学資

料の丁寧な読解と自身の想像力を織り交ぜながら、地下1階のインスタレーション《ながれ》(pp. 11-14)と地上ガラス壁及び地下から地上へ繋がるコンクリート壁に描かれた《Utsuwa (土師器)》(pp. 5-10, 18)、またリサーチの過程で描いたドローイングやスケッチブックなど (pp. 16, 17) を含めた計7点で展示を構成している。なかでも、《ながれ》と《Utsuwa (土師器)》は別々の作品でありながらも光の変化によって相互に作用する、ザ・トライアングルの空間全体を使ったインスタレーション作品でもある。湊は展示プランを構想するにあたり、空間に差し込む光の変化を定点観測することから始めた。日々変わりゆく光のうつろいや、特定の時間帯にだけ差し込む太陽光の位置と距離、またそれによって認識される色彩や空間を際立たせることで、開館から閉館までの一日の光の推移を展示の重要な一部として取り入れている²。

地下1階の《ながれ》では、かつてこの場所に存在した流路に沿うように、北東から南西に向かって3枚の帯状の白い布が掛けられた。布には、土師器が製作されたのとほぼ同時代に栄えていたとされるエトルリア文明の石片や貨幣、キクラデス文明の彫像などの考古遺物がモチーフとして引用されている。それぞれ

のかたちには、アルミ箔、銀箔、錫箔^{ナズ}の3種類の箔が使用され、部分ごとに異なる鈍い輝きを放つ。晴れた日には、地上のガラス壁を透過した太陽光が地下まで差し込み、箔の表面に赤みがかかった眩い光を湛えている。なかでも銀箔は、酸化作用によって銀白から黒へ徐々にその色を変える性質を持つ。後述する《Utsuwa (土師器)》の顔料に紫外線の影響を最も受けやすい赤やピンクの蛍光色を用いたことも、時間の経過による退色を意識してのものだ。いっぽうで展示室北側の壁にはミラーシートが貼られ、日が暮れると青色に塗られた東側の壁との反射作用により、鑑賞者が展示空間を通過するたびに光がゆらゆらと床に落ち、水中にいるような揺らぎが現れる (p. 12)。

湊は以前より、ガリア、ケルト、イスラムなどの異なる文化や文明を参照し、日頃から持ち歩くスケッチブックに様々な事柄を描き留めてきた³。大きな歴史には記述されてこなかった故に忘れ去られてしまったかもしれない事象に思いを馳せ、その土地にある痕跡を見つけ働きかけようとする。フランスを拠点とし、自らの他者性を認識しながらも、さらにここではない別の場所を見つめる視点は、自身がアジア人であり女性であることを否応なく認識しつつ、長い年月を

過ごしながらもなおその土地に違和感を持ち続けている湊の生活と無関係ではないだろう。束の間現れては消えていく光と影の連続や素材そのものの変容に、時間の経過や文明の衰退などが象徴的に重ねられ、時間のうつろいを物質的にも空間的にも視覚化しようとする取り組みが体现されている。遠く離れたキクラデス文明やエトルリア文明への飛躍も、連続する大きな時間のながれの中に私たちが在ることを体感させると同時に、この場所に存在してきた人間の営みをあらためて確認する作業とも言える。

《Utsuwa (土師器)》は、上述の流路から出土した土師器をモチーフに (p. 17右)、地上のガラス壁と、地下から伸びる7メートルのコンクリート壁にアルミシートを貼って描かれている。その大胆なストロークから、一見するとその場で即興的に描かれたようにも見えるが、実際は入念に準備された複数の工程を経て実現されている⁴。あらかじめ紙に描いたドローイングをそのまま拡大するように、まずはマスキングテープで支持体に細かく位置出しをする。その位置に沿って薄い絵具で下書きをし、テープを剥がしてから描く作業へと移行するのだが、幾度も立ち位置を変え、描画途中のイメージとドローイングにずれが生じていな

いかを注意深く確認しながら作業が進められてゆく。顔料は、その日の気温や湿度を考慮しながらメディウムと配合して、複数の階調を作る。それらを描きながら混合し、数種類のハケで引き伸ばすことで発色を調整しつつ描画する。およそ高さ3メートル、長さ20メートルの横長のガラスに向かい、湊は全身を大きく伸縮させ、ハケを上下に動かしつつ、連ねた脚立を使って左右に移動しながら描き進める。完成したイメージは、紙に描かれた手元のドローイングと寸分違わないようでありながら、ガラスの表面には運動の痕跡がしっかりと残されているのが見て取れる。

湊は自分の身体よりはるかに大きな支持体に臨む時、必ずドローイングに立ち戻っている。決して即興的に描くことをしないのは、一人の人間が対象を認識し表すことが可能だと考えるサイズ——ちょうどスケッチブックやA4サイズ——でアウトプットされたイメージへの強い確信によるものだ。湊曰く、プロジェクターで像を拡大して投影したこともあったが、その線をなぞって描いてみても、そこには余白との間に生じる緊張感は生み出されなかったという。余白は湊にとって空間、言い換えるならば世界と地続きの場所である。

白紙の紙の上に描かれたイメージを、1ミリもその線をずらすことのないような集中力で、自らを媒体として世界との境界に／として現出させようとする。これまでの作品制作やタイトルに、「器」という言葉を頻繁に用いてきたのは、様々な土地において人間の営みと共に使われてきた道具であると同時に、文化を包み込む大きな入れ物としての機能を象徴してのことだという。しかしながらそれ以上に、湊にとって器とは、人間の生命を繋ぎ伝えてゆく身体であり、さらには、対象のリサーチで得た事象にその身を浸し、表現として表出する自分自身でもあるだろう。それは意味が幾重にも重なり合う象徴としての器を通し、太古から続く人間の行為である「描く」こと、そこから生み出されるイメージの普遍性を探る根源的な探求でもある。

(くにえだ・かつら／京都市京セラ美術館アソシエイト・キュレーター)

- 1 京都市京セラ美術館の再整備事業に伴って実施された埋蔵文化財発掘調査による。「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2014-13 円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡」公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2015年。
- 2 当館YouTubeにて展示室内の光の記録を公開している。
<https://www.youtube.com/watch?v=2dWdheW9f1Y>
- 3 2006年の渡仏後から2021年現在まで計100冊にのぼる。
- 4 当館YouTubeにて制作風景動画を公開している。
https://www.youtube.com/watch?v=W9C_AkRe2hU

Images from Vessels

Kunieda Katsura

Associate Curator, Kyoto City KYOCERA Museum of Art



Fig. 1 *Chêne Châtaigne*, installation view at L'Art dans les Chapelles, 2012
Photo: Stéphane Cuisset



Fig. 2 *Misuzukaru Shinano*, installation view of Japan Alps Art Festival 2017
Photo: Tsuyoshi Hongo



Fig. 3 *Nemeton*, La Conque, Nanterre, France, 2019–22
Photo: Jérémie Souteyrat

Minato Mari studied design at Kyoto City Dohda Senior High School of Art and majored in *nihonga* (Japanese painting) at Kyoto City University of Arts. She then moved to France, graduating from the Beaux-Arts de Paris and subsequently living in Paris for the next fourteen years. Following her relocation to France, her practice has focused on paintings and installations based on in-depth research into a site, sketches of archaeological artifacts, and careful observation of the exhibition space. From a church chapel (Fig. 1) to an Edo-era storehouse (Fig. 2) or outdoor theater (Fig. 3), many of her projects have involved directly painting onto architecture, pursuing a form of exhibiting in which the viewer can physically sense the space, including the shifts in the natural light and the movement of the air, and which can maximize those effects.

In this exhibition, Minato focused on the historical evidence for the natural water channels that have existed

until now in the Okazaki area, where the Kyoto City KYOCERA Museum of Art is located.¹ Taking for her departure point the several watercourses formerly found here as well as the Haji pottery excavated from them, she interwove careful reading of archaeological materials with her own imagination to create a set of seven exhibits, including the installation *Through the Ages* (pp. 11–14) in the first basement, *Utsuwa (Haji pottery)* (pp. 5–10, 18), which was painted onto the above-ground glass walls and the concrete wall linking the ground and basement levels, and the drawings and sketchbook (pp. 16, 17) she produced during the course of her research. In particular, *Through the Ages* and *Utsuwa (Haji pottery)* formed an installation that made use of the entire space of The Triangle, the two works, though discrete, interacting with each other due to fluctuations in the light. To envision her plan for the exhibition, Minato started by making fixed-point observations of the changes in the light that penetrated the space. By emphasizing the transitions in light over the day, the position and distance from the sunlight that enters only at certain periods of time, and the space or colors perceived through that, she incorporated the shifts in light over a single day from the museum's opening to closing as a vital part of the exhibits.²

For *Through the Ages* on the first basement floor, three strips of white fabric were hung from the northeast to southwest, as if following the watercourses that once flowed in this place. On the fabric were motifs referencing archaeological artifacts like money and stone fragments from Etruria, whose civilization flourished at roughly the same time as Haji pottery, and Cycladic statues. These shapes used three types of foil (silver, tin, aluminum), emitting a dull luster that varied from part to part. On bright days, sunlight shone through the glass wall on the ground level and reached the basement, the surfaces of the foil brimming with a dazzling, rufescent light. The silver foil, in particular, gradually changed color from argent to black due to oxidation. The use of fluorescent colors like pink and red, which were most susceptible to the impact of ultraviolet on the *Utsuwa* (*Haji pottery*) pigment, as discussed below, was a choice conscious of how color degrades over time. On the other hand, the wall on the northern side of the gallery was lined with mirrors, reflecting the east wall as it turned blue when the sun went down, causing light to shimmer on the floor and conjuring up a kind of underwater, wavering effect for viewers as they passed through the gallery space (p. 12).

Minato has previously referenced Gallic, Celtic,

Islamic cultures and civilizations, and copies down various patterns in the sketchbooks that she takes around with her on a daily basis.³ Her mind drawn to the things forgotten and lost because they were not recorded in mainstream history, she attempts to find and work on the traces that remain in the land. Based as she is in France, she is conscious of her otherness, while her perspective examining another place, not the one here, is inevitably aware of her own nature as an Asian and a woman, and surely not unrelated to her own life, living for many years in a place yet nonetheless feeling disquiet toward it. The cycle of light and darkness, fleetingly appearing and disappearing, and the shifts in the materials themselves are symbolically overlaid with the passage of time or the decline of civilizations, embodying an endeavor that attempts to visualize, both materially and spatially, temporal transitions. The leaps to the distant Etruscan and Cycladic civilizations allow us to experience how we exist within an immense, continuous flow of time, while also forming a task of reconfirming the activities of the humans who have existed in this place.

With motifs based on the titular pottery (p. 17) excavated from the aforementioned watercourses, *Utsuwa* (*Haji pottery*) was painted onto the above-ground

glass walls and aluminum sheeting pasted over the seven-meter concrete wall stretching from the basement up to the ground level. With the work's bold brushstrokes, it initially looks like something painted impromptu in the venue, but it was actually realized following several meticulously planned procedures.⁴ As if to expand the drawing she did in advance on paper just as it was, she first minutely marked it out on the support with masking tape. She then did a rough version with thin paint according to those markings, before taking off the paint and proceeding to the full painting stage, though the work developed as she constantly changed where she stood and carefully checked for discrepancies between the drawing and the image being painted. The pigment was mixed with a medium while taking into consideration the temperature and humidity that day, creating multiple tones. Mixing these and extending them with various kinds of brushes, she would adjust the coloring and paint. Facing the oblong glass stretching three meters in height and twenty meters in length, Minato greatly bent and stretched her whole body, moving her brush up and down, and using rows of stepladders to shift left and right as she worked. The completed image seemed exactly like the drawing she did on paper and had on hand, though the surface of the

glass also retained firm traces of movement.

When facing a support so much larger than her own body, Minato always goes back to drawing. That she never works impromptu is due to her strong conviction in the image outputted in the size (exactly a sketchbook or A4 sheet of paper) in which a single human being believes it possible to perceive and express a subject. She says she has previously used a projector to blow up and project images, but though she tried to work by tracing along those lines, she couldn't capture the tension that arises between the lines and the gaps. These gaps are, for Minato, space or, to put it another way, a place adjoining the world. With such concentration so as not to shift those lines by even a millimeter, she paints the image drawn on white paper, attempting to bring out herself as a medium, herself on/as a border with the world. In her work process and titles to date, she has frequently employed the word *utsuwa* (vessel), symbolizing both the tools used for human activities in various places and also how human activities function as an immense receptacle that encloses culture. But even more than that, for Minato, a vessel is the body that connects and passes on the life of humankind and, moreover, also surely herself, who submerges that body in the things

acquired from researching a subject matter, and then emerges as artistic expression. Through the vessel as a symbol of multilayered meaning, it is also the primitive search for the ancient human act of drawing or painting something, and for the universality of the images created from this.

- 1 According to a buried cultural properties excavation carried out as part of the renovation work for Kyoto City KYOCERA Museum of Art. "Kyoto City Archaeological Research Institute Excavation Report 2014–13: Enshoji, Joshoji, Shirakawa, Okasaki Historical Sites" (Kyoto City Archaeological Research Institute, 2015).
- 2 The museum has published a video on YouTube showing the changing light in the exhibition spaces. <https://youtu.be/2dWdheW9f1Y>
- 3 These now number as many as a hundred, dating from after she first moved to France in 2006 until 2021.
- 4 The museum has published a video on YouTube showing the creation of the work. https://youtu.be/W9C_AkRe2hU

作品リスト

ザ・トライアングル

① Utsuwa (土師器)

2021年 | ガラス壁、コンクリート壁とアルミニウムテープの上にペイント (顔料・アクリル)
可変

② ながれ

2021年 | 布の上に銀箔、錫箔、アルミ箔、アクリル、消石灰、壁にペンキ、ミラーシート
可変

②-1 エトルリア I

70 × 2,000 cm

②-2 エトルリア II

70 × 2,000 cm

②-3 キクラデス諸島

70 × 2,000 cm

③ 地層シリーズ VII ながれ I

2020年 | 紙に水彩、鉛筆
29.7 × 21 cm

④ 地層シリーズ I

2020年 | 紙に水彩、鉛筆
29.7 × 21 cm

⑤ 地層シリーズ II

2020年 | 紙に水彩、鉛筆
29.7 × 21 cm

⑥ 地層シリーズ VI

2020年 | 紙に鉛筆
32 × 24 cm

⑦ カルネ (スケッチブック)

「はるかなるながれ、ちそうたどりで」
2020年4月29日～ | 紙にボールペン
21.6 × 30.5 cm (カルネページ見開きサイズ)

List of Works

The Triangle

① Utsuwa (*Haji pottery*)

2021 | Paint (pigment, acrylic) on glass wall, elevator wall, and aluminum tape
Dimensions variable

② *Through the Ages*

2021 | Silver foil, tin foil, aluminum foil, acrylic, and slaked lime on fabric, paint on wall, mirror sheet
Dimensions variable

②-1 *Etruscans I*

70 × 2,000 cm

②-2 *Etruscans II*

70 × 2,000 cm

②-3 *Cyclades*

70 × 2,000 cm

③ *Horizons Series VII, Nagare I*

2020 | Watercolor and pencil on paper
29.7 × 21 cm

④ *Horizons Series I*

2020 | Watercolor and pencil on paper
29.7 × 21 cm

⑤ *Horizons Series II*

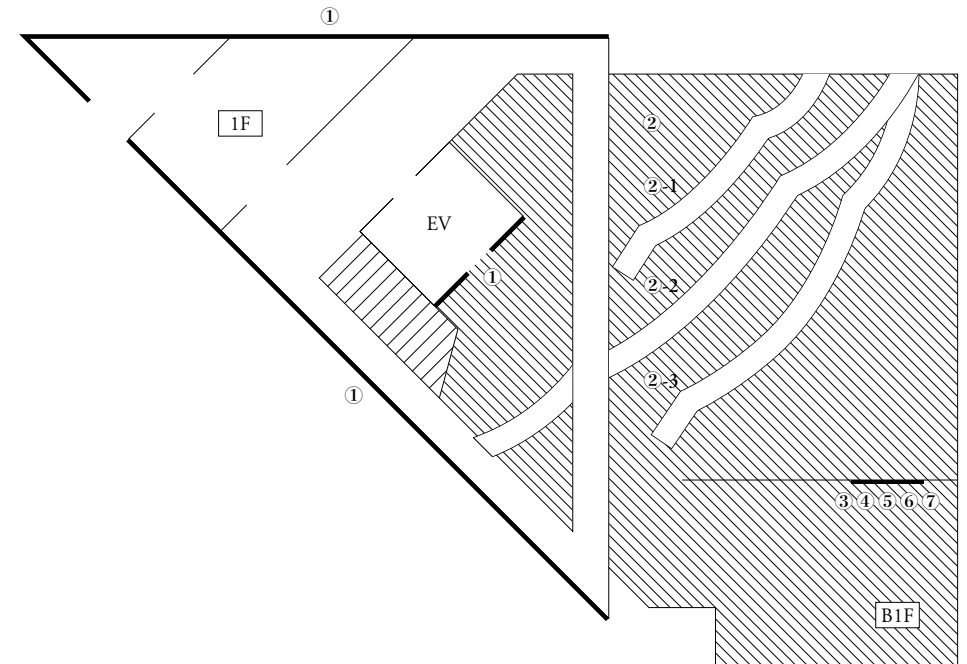
2020 | Watercolor and pencil on paper
29.7 × 21 cm

⑥ *Horizons Series VI*

2020 | Pencil on paper
32 × 24 cm

⑦ *Carnet (sketchbook) of Horizons*

From April 29, 2020 | Ballpoint pen on paper
21.6 × 30.5 cm (carnet double-page spread)



湊茉莉 みなと・まり

1981 京都市生まれ
 2004 京都市立芸術大学美術学部日本画専攻卒業
 2006 同大学大学院美術研究科絵画専攻日本画修了
 バリ国立高等美術学校に交換留学（翌年、同学校に編入）
 2009 バリ国立高等美術学校ディプロマ取得
 2010 同学校ポスト・グラデュエート・ディプロマ取得
 現在 バリ在住

主な個展

2015 「マリ・ミナト」ブルミエ・ルガール・ギャラリー（パリ）
 「空間のかげら」リシャール・ギャラリー（パリ）
 「スペース・パーツ」ミヤコ・ヨシナガ・ギャラリー（ニューヨーク）
 2017 「ノート、二つの大河のはざまにて」エリック・デュボン・ギャラリー（パリ）
 2019 「うつろひ、たゆたひといとなみ」銀座メゾンエルメスフォーラム（東京）
 「ルトゥール・ドリアン」エリック・デュボン・ギャラリー（パリ）

主なグループ展、アートフェア

2007 「国際交流展」ゴーシュ・ギャラリー、バリ国立高等美術学校（バリ）
 2009 「アトリエ ジャン＝ミッシェル・アルペロラ展」バリ工芸博物館（バリ）
 2010 「DNSAP 最優秀賞選抜展『原子の運動、形態の可動性』」バリ国立高等美術学校（バリ）
 2011 「スモール・イズ・ビューティフル」LMD ギャラリー（パリ）
 「ドローイング・ナウ・バリ 2011」カルーゼル・デュ・ルーヴル（パリ）
 「ニューイ・ブランシュ KYOTO 2011」関西日仏学館（現・アンスティチュ・フランセ関西）（京都）
 「ジュンヌ・クレアシオン 2011」アートセンター 104（パリ）
 2012 「エコール・デ・ボザール留学生展 Les Phénomènes s'émeurent — 一切の事象が蠢きはじめたー」京都市立
 芸術大学ギャラリー @KCUA（京都）
 「リトルフクシマ」バリ国際芸術都市（バリ）
 「クリシェを越えて」バリ国際大学都市・日本館（パリ）
 「円の切片の上の方形の切片」アルク＝エ＝スナンの王立製塩所、アルク＝エ＝スナン（フランス）
 「礼拝堂のなかの芸術展 2012」ブルターニュ（フランス）
 「ART NAGOYA 2012」ウェスティンナゴヤキャッスル（名古屋）
 2013 「振る舞いモデル：南隆雄・湊茉莉・八嶋有司」オオタファインアーツ（東京）
 「何よりもまずゆっくりと……」エスパス abcd、モントルイユ（フランス）
 「アート・オン・ペーパー +1」ホワイトホテル、ブリュッセル（ベルギー）
 2014 「サロン・ド・モンルージュ」モンルージュ（フランス）

2015 「超京都 artkyoto2015」京都文化博物館（京都）
 2016 「ドローイング・ナウ・バリ 2016」カロ・デュ・タンブル（パリ）
 「アート・ブリュッセル 2016」ツアー&タクシー、ブリュッセル（ベルギー）
 「礼拝堂のなかの芸術展 2016」ジャン・フルニエ・ギャラリー（パリ）／バン＝ドゥーシュ、ボンティヴィー
 （フランス）
 「アムステルダム・ドローイング：コンテンポラリー・アート・オン・ペーパー」ケルス・ギャラリー、
 アムステルダム（オランダ）
 「ブルミエ・ルガール 15 周年記念展」パスティエ・デザイン・センター（パリ）
 2017 「ドローイング・ナウ・バリ 2017」カロ・デュ・タンブル（パリ）
 「アート・ブリュッセル 2017」ツアー&タクシー、ブリュッセル（ベルギー）
 「北アルプス国際芸術祭 2017」水のながれる家、信濃大町（長野）
 「開かれた書——カリグラフィーからストリート・アートまで」イスラム文化センター（パリ）
 「ギャラリスト 2017」カロ・デュ・タンブル（パリ）
 2018 「行為の詩学」ラ・グレストリー、ウイユ（フランス）
 「ギャラリスト 2018」カロ・デュ・タンブル（パリ）
 2019 「アントワース・マラン賞 2019」フリオ・ゴンサレス市立ギャラリー、アルクイユ（フランス）
 2020 「過ぎゆく瞬間 2」アートスペース FL、シャンボール（フランス）
 「国際稀書サロン 2020」グラン・パレ（パリ）

主なプロジェクト、常設インスタレーション

2014 《無限形》ネッケル小児病院（パリ）
 2015 《大陸移動》AU dormitory、ナンサナ（ウガンダ）
 2018 《異文化交流》バリ国際大学都市内国際館・食堂（バリ）
 2019–22 《Nemeton》ナンテール市野外劇場コンク（フランス）

Minato Mari

- 1981 Born in Kyoto Prefecture, Japan
- 2004 Graduates Kyoto City University of Arts Faculty of Fine Arts with a major in Japanese traditional *nihonga* painting
- 2006 Completes postgraduate studies in *nihonga* at the Kyoto City University of Arts Graduate School of Arts
Studies at the Beaux-Arts de Paris as an exchange student (transfers the following year)
- 2009 Earns diploma from the Beaux-Arts de Paris
- 2010 Earns postgraduate diploma from the Beaux-Arts de Paris

Currently resides in Paris

Selected Solo Exhibitions

- 2015 *Mari Minato*, Galerie Premier Regard, Paris
Parcelles d'Espaces (Parcels of Space), Galerie Richard, Paris
Space Parts, Miyako Yoshinaga Gallery, New York
- 2017 *Notes, entre deux fleuves* (Notes, between the Two Rivers), Galerie Eric Dupont, Paris
- 2019 *Vanishing Droplets in a River*, Le Forum, Ginza Maison Hermès, Tokyo
Retour d'Orient (Return from the Orient), Galerie Eric Dupont, Paris

Selected Group Exhibitions & Art Fairs

- 2007 *International Exchange Exhibition*, Galerie Gauche, Beaux-Arts de Paris, Paris
- 2009 *Exposition Atelier Jean-Michel Alberola* (Jean-Michel Alberola Studio Exhibition), Musée des Arts et Metiers, Paris
- 2010 *Mouvement des Atomes, Mobilité des Formes* (Movement of Atoms, Mobility of Forms), Galeries d'exposition de l'École nationale supérieure des beaux-arts, Paris
- 2011 *Small Is Beautiful*, Galerie LMD, Paris
Drawing Now Paris 2011, Carrousel du Louvre, Paris
Nuit Blanche Kyoto 2011, Institut franco-japonais du Kansai (today, Institut français du Japon-Kansai), Kyoto
Jeune Création 2011, Centquatre-Paris, Paris
- 2012 *École des Beaux-Arts Student Exhibition*, Les Phénomènes s'émurent, Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA, Kyoto
Little Fukushima, Cité Internationale des Arts, Paris
Au-delà des clichés (Beyond Clichés), Maison du Japon, Paris
Tranches de carrés sur tranches de cercles (Tranches of Squares on Tranches of Circles), Royal Saltworks of Arc-et-Senans, Arc-et-Senans, France
L'Art dans les Chapelles (Art in the Chapels), Bretagne, France

- 2013 *ART NAGOYA 2012*, Westin Nagoya Castle (today, Hotel Nagoya Castle), Nagoya
Behavior Model: Takao Minami, Mari Minato, Yushi Yashima, Ota Fine Arts, Tokyo
De la lenteur avant toute chose . . . (Slowness, Above All Else), Espace abcd, Montreuil, France
Art on Paper+1, White Hotel, Brussels, Belgium
- 2014 Salon de Montrouge, Montrouge, France
- 2015 *CHO KYOTO artkyoto 2015*, The Museum of Kyoto, Kyoto
- 2016 Drawing Now Paris 2016, Carreaux du Temple, Paris
Art Brussels 2016, Tour & Taxis, Brussels, Belgium
L'Art dans les Chapelles, Galerie Jean Fournier, Paris; Bain-Douches, Pontivy, France
Amsterdam Drawing Contemporary Art on Paper, Kers Gallery, Amsterdam, Netherlands
Les 15 ans de Premier Regard (15 Years of Premier Regard), Bastille Design Center, Paris
- 2017 Drawing Now Paris 2017, Carreaux du Temple, Paris
Art Brussels 2017, Tour & Taxis, Brussels, Belgium
Japan Alps Art Festival 2017, House of Flowing Water, Omachi City, Nagano
Lettres Ouvertes, de la Calligraphie au Street Art (Open Letters: From Calligraphy to Street Art), Institut des cultures de l'Islam, Paris
Galeristes 2017, Carreaux du Temple, Paris
- 2018 *Poétique du geste* (Poetics of Gesture), La Graineterie, Houilles, France
Galeristes 2018, Carreaux du Temple, Paris
- 2019 *Prix Antoine Marin 2019*, Galerie municipale Julio Gonzalez, Arcueil, France
- 2020 *l'instant qui passe 2* (The Moment That Passes 2), Espace FL, Chambord, France
Salon International du Livre Rare 2020, Grand Palais, Paris

Selected Projects & Permanent Installations

- 2014 *The Endless Shapes*, Necker-Enfants Malades hospital, Paris
- 2015 *Drifts*, AU dormitory, Nansana, Uganda
- 2018 *Acculturation*, Maison Internationale, Cité Internationale Universitaire de Paris, Paris
- 2019–22 *Nemeton*, La Conque, Nanterre, France

湊茉莉：はるかなるながれ、ちそうたどりて

〔展覧会〕

国枝かつら（京都市京セラ美術館）

〔カタログ〕

編集：水野良美（京都市京セラ美術館）

翻訳：ウィリアム・アンドリュース（pp. 4, 22–25）

翻訳協力（仏和）：土山亮子（p. 27）

撮影：三吉史高（pp. 5–18）

デザイン：菊地敦己

発行日：2021 年 6 月 13 日

発行者：京都市京セラ美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎門勝寺町 124

www.kyotocity-kyocera.museum

Minato Mari: Horizons

〔Exhibition〕

Kunieda Katsura (Kyoto City KYOCERA Museum of Art)

〔Catalogue〕

Edited by: Mizuno Yoshimi (Kyoto City KYOCERA Museum of Art)

Translation: William Andrews (pp. 4, 22–25)

French-Japanese Translation: Tsuchiyama Ryoko (p. 27)

Photography: Miyoshi Fumitaka (pp. 5–18)

Designed by: Kikuchi Atsuki

First Edition: June 13, 2021

Published by Kyoto City KYOCERA Museum of Art

124 Okazaki Enshoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8344 Japan

www.kyotocity-kyocera.museum

© Mari Minato © saif

© Kyoto City KYOCERA Museum of Art 2021